

大学出版

大学と社会を結ぶ 知のネットワーク

NO.80
2009.11

秋

特集

変容する専門書マーケット

〔インタビュー〕

取次の近代と出版流通の未来

——東京大学大学院・柴野京子さんに聞く…… 2

〈書物復権〉の試み

——8 出版社共同事業と東京国際ブックフェア共同出版 持谷寿夫…… 10

関西の専門書市場とマーケティング戦略 土橋由明…… 15

大型チェーン書店の台頭と独立系書店の行方

——ポーランド出版事情—— 橋元博樹…… 21

●連載

初版本、ナンセンスなフェティシズム

鶴見祐輔著『母』 酒井道夫……表2

大学出版部ニュース…… 26



一般社団法人大学出版部協会

THE ASSOCIATION OF JAPANESE UNIVERSITY PRESSES

初版本、ナンセンスなフェイシズム

鶴見祐輔著

『母』

酒井道夫（武蔵野美術大学）



「母」の書体が三種類あることに注目。続篇「子」も気になるなあ。

初版本（大日本雄辯會講談社刊、一九二九、装丁・挿画 伊東深水）ではないが、発行時（一九三六、五一九版だつて！ホンマカイナ）に着せられたであろう、エグイジャケットに惹かれて購入した。ジャケット自体は相当傷んでいるが、その代わり本体がしっかり養生されていて、刊行当初の雰囲気は良く残していると思う。ざっくりした生成りの布（手織風の絹布かも）で被われた四六判丸背ハードカバーの背と平には、黒の箔押しがくつきりと施されていて、どこにも剥落した部分がない。そのため、装丁者伊東深水の手際良い感性を、今も見事に伝えている。恐らくジャケットデザインの方は深水の手によるものではなく、販促を兼ねて版元が仮に着せた養生紙だと思うのだがどうだろうか？ 深水による図版を一葉用いてはいるものの、全体の意匠感覚や表題書体の選び方が、本体装丁のハイセンスとは違い過ぎる。この点が、今日の装丁概念とは遥かに異なるところだ。ジャケットデザインは装丁にあらず。

この本はひと頃、講談社学術文庫に収録されていたが現在は品切れ中。かつては角川文庫にも収録されていたらしい。私はこれまで、この文庫版の存在に全く気付かなかつたのだ。たとえ知っていても、手に取るうとしたかどうかが疑わしい。門外漢とはいえ、浅薄な教養科目としての日本近代文学史に全く登場してこないこの「教養小説」が、かつて膨大な数の読者大衆を獲得して成立していたことを初めて知って、恥じ入るしかない。

本年とって九七歳になる私の老母が、若かりし頃の記憶として時どき鶴見祐輔について語ることがあったので、彼に対するうつつらとした知識はあった。日本各地に遊説し、民主主義と女性の社会参加を大衆に呼びかけた開明的論客としての鶴見祐輔。そんな思い出を彼女がポツリと語ることがあったほど、彼の言説は民衆に圧倒的に浸透したらしい。四センチほどもある分厚な束を繻くにつれて、深水の口絵と四点の挿画が楽しめる。こうして一気に読み進んだ大正版『金色夜叉』といった趣は、なかなかの収穫だった。

特
集

変容する専門書マーケット

取次の近代と出版流通の未来——東京大学大学院・柴野京子さんに聞く

【解説】

柴野京子氏は、一九六二年生まれ、株式会社トーハンを経て、現在、東京大学大学院情報学環博士課程在学中、相模女子大学非常勤講師も務める。取次に勤務していた経験を生かして、出版流通を歴史社会学・メディア論の視点から研究しており、今年七月には、修士論文に加筆修正を加え『書棚と平台——出版流通というメディア』（弘文堂）として刊行した。同書については、「これまで出版流通について書かれた最も優れた作品である」（箕輪成男氏）、「本の未来を考えると、本書が示唆するものはたくさんある」（永江朗氏）など多くの反

響を呼び起こしており、今後の出版を占う際の必読文献であることは間違いないだろう。

出版流通をめぐるのは、高い返品率の一方で配本が読者のニーズに切れぬなど、取次を中心として様々な課題を抱えている。各所で議論が活発に交わされているなか、いまに至る流通の来歴を冷静に分析することから始まった今回のインタビューは、出版の未来を考えていくうえで示唆に富んだ論点が散りばめられていると思う。読者の皆様の参考になれば幸いである。

（聞き手・構成 東京大学出版会・橋元博樹／山田秀樹）

書籍流通と雑誌流通の歴史

——日本の書籍と雑誌は、同じルートで流通するということ、世界的にも例のないシステムであると言われます。このたび刊行された『書棚と平台』のなかで、柴野さんはそのふたつを丁寧に分けて書かれています。書籍流

通がどのように雑誌流通に吸収されていったのか、その歴史を概観していただけますか。

——一般的にどの国でも書籍と雑誌は別物で、雑誌は新聞と同じ扱いです。実は日本でも、もともとはそうでした。

今、当たり前のように書籍と雑誌が同じ本屋で売られています。さすが、歴史的にはそうではなかったのです。

雑誌というのは明治になってから登場した近代的なメディアでして、新聞と同じように西洋からもたらされたものです。その知的インフラを日本の国内で流通させていくことが、最初から計画的につくられていく。それは鉄道のシステムと一緒にあっており、非常に分かりやすい。中心は東京にあって、中心から外側に同じように一律に行き届かせるということが、最初からミッションとなつてつくられたのです。

一方、書籍というものは中世からありました。そこから連続と続いているわけで、もともと地域的に限定された中規模の流通システムがあつたのです。それが戦前までは何らかの形で引き継がれていた。この、全く違う文脈のふたつのものがあつたということ、まず押さえておく必要があります。



それが変化していくのは、日本では書籍も雑誌も全部出版してしまおうという大きな出版社が出てきたことが大きいと思います。欧米の場合、出版社は雑誌なら雑誌社として育っていきませんが、日本は総合出版社という形で育っていくところに特徴があります。なぜそういう形になったのか。おそらく一気に近代化が来たからだと思うのです。そのなかで、書籍づくりと雑誌づくりの両方のノウハウを持つ博文館などの出版社が出てきます。博文館は『日本大家論集』という雑誌からスタートした出版社ですが、のちに共同印刷となる博文館印刷所や、小売と卸の東京堂も設立し、近代最大の出版コングロマリットに成長しました。そうした中で徐々に流通部分が吸収・合併されていきますが、それが最終的に大きな塊になるのを推進したのが、雑誌の流通システムを担った人たちです。彼らとしては、自分たちが生活できるようにするための産業組織をどうしてもつくらなければいけないわけで、初期の段階で一生懸命やるのです。その際、書籍と一緒に巻き込んでしまおうというベクトルが働くのです。

ただし、書籍は全部が雑誌に同調したわけではありません。表向きは、定価販売など都合のいいところは乗っかっていくのですが、基本的には別物であつたと思います。

というのは、雑誌は当初から発行者と流通業者は別なのです。これに対して書籍は作った人が売るといふことで、同じ人・組織が担っていく。そういうビジネスモデルが後

まで残るので、雑誌のように流通の部分だけが大きな産業組織として形づくられていくことがなかったのです。

——確かに、老舗の本屋さんには歴史的に出版部を持っていますね。

例えば京都の出版社はそうですね。京都の、とりわけ専門書を扱う歴史ある出版社は、自社の出版物を自社で売るといふ形態が残っている。雑誌と違うところです。

——その後、『大正大震災大火災』（講談社）がひとつの契機となり、書籍流通が雑誌流通の中に組み込まれていくのですね。

そうですね。直接の契機は、関東大震災の翌年、大正二年に『大正大震災大火災』という本を講談社がつくり、そのときに書籍のインフラが震災で打撃を受けていたので、雑誌の流通に乗せたことです。それが大成功したわけですが、それは雑誌のインフラの強さ、その時点で既に組織的に盤石であったことを示しています。やはり書籍は産業システムとして負けていたのです。その雑誌に乗っかってしまおうということ、大きく舵が切られることになったのです。

日配の適正配給・適正配本

——流通史の中で、日本出版配給株式会社の果たした役割はきわめて大きかったと思いますが、その功罪についてどのように見えますか。

書籍と雑誌が表向き相乗りをしていく、それをひとつの取次の中で実現させるのは、国家の統制機関である日本出版配給株式会社（一九四一—一九五〇。以下、日配）が行ったことです。日配の話というのはこれまで言論統制的な文脈からされることが多かったのですが、同時に、出版物の統制というのは、配給統制、つまり物資の統制でもあるわけです。用紙をどの出版社に渡すかということ、できたものをどこに配分するかという、ふたつの配給をコントロールすることが日配の上部機関である日本出版文化協会の使命でした。普通、私たちは、戦時の統制は強制的なものというイメージがあるのですが、よく調べてみると必ずしもそうではなく、日配では草の根的なものをいかにつくっていくかということ、すごく言っています。

彼らは、都市のインテリではなく、むしろ本を読んでいない地方の人たちをターゲットに、いかに「読書」なるものを発掘していくかを一生懸命追求するのです。そして、そのために膨大な調査を行います。これは『書棚と平台』にも書きましたが、日配が発行していた「日配通信」という冊子に、毎号統計資料がとにかく膨大に出てきます。こ



http://www.yuhikaku.co.jp/

現代アメリカ 外交の変容

レーガン、ブッシュ
からオバマへ

村田晃嗣著 四六判 2520円

レーガン政権以降の米外交の展開と変容を分析。

ナショナリズム論 入門

大澤真幸・姜 尚中編

〔有斐閣アルマ〕 2310円

現代社会の1つの焦点、
「ナショナリズム」を分析。

グローバルゼーション

現代はいかなる時代なのか

正村俊之著

〔有斐閣Insight〕 1575円

地球的規模の相互依存を
総合的にとらえる。

環境の社会学

関 礼子・中澤秀雄・
丸山康司・田中 求著

〔有斐閣アルマ〕 1995円

環境問題を実際の身体や
暮らしをとおして考える。

健康心理学 入門

健康なこころ・
身体・社会づくり
島井哲志・長田久雄・
小玉正博編

〔有斐閣アルマ〕 1995円

現代の社会的ニーズをふ
まえ、バランスよく解説。

◎図書目録送呈◎

これは調査部というのが日配の中にあり、出版に関わるいろいろな調査、場合によってはどういう判型のものが売れたのか、など意味があるのか分からないような調査を徹底的に行い、その数字を掲載しているのです。

地方にも人を派遣して調査している。どういう本が読まれているのかを徹底的に調べる。これは何を目的としていたのかというと、どの地方にどうい、内容、価格、装丁のものを、どのくらい配本すれば、底上げ、ボトムアップにつながるかを調査しようとしたのでしょう。しかし結局、それは難しかったようです。調べても把握できるものではないということですね。

この話の関連として、すぐピンときたのは現在のPOSシステムです。POSというのは市場のデータを吸い上げるのですが、それは結果でしかない。それに似たものを配本することにおいて全く無効だとは言わないけれども、そこから読めるものは、本当に限られるわけです。事実はこうだということしか分からないわけで、それ以上に、そこ

にどのような人がいて、どのような本が読まれるだろうということを、データから読み取るのは難しい。それは日配が目指した一番大きな目標でしたが、成功しなかったのです。

日配による合理化施策

日配の施策というのは、もうひとつは合理化でした。数少ない資源をうまく運用しなければならぬわけですから、合理化を行っていく。このコスト削減については、大きな効果が出ます。例えば、今までバラバラに配送していたものを一緒に配送しましょう、などという合理化です。

同時に、仕事も合理化していくのです。労働者を兵隊に取られていくので、いわゆる女子が急に入ってもできるような単純なシステムを編み出していく。

この合理化は成果を上げていきます。加えて、適正配本によってロスなくさらにボトムアップを図るといって一石二鳥を狙うわけですが、先ほど言いましたように、こちらの



ほうはうまくいかない。うまくいかないでいるうちに、戦時下の厳しい状況ゆえそもそも配本できるような本自体がなくなっていました。

最後にはどういうかたちになるかという点、適正配本はあきらめ、本も少ないので地域に読書会のようなグループをつくらせ、工場や青年部などの集まりに対し何冊配本という仕組みにしてしまう。予めマーケットをつくることで規定し、そこに合うものを配給するというかたちに移行するのです。

—— 日配が戦後の取次に継承されていく際、合理化の施策はプラスの側面として受け継がれたのでしょうか。

戦時下の体制ですので批判もあるかと思いますが、徹底的に合理化したことにより改善されたことも多く、日本の出版物の流通がこれだけ低コストで出来たのは日配の下地

があったからだと思います。それはある意味で評価できるかもしれない。

本来、書籍はもう少しコストがかかるはずでしたが、雑誌と流通を一本化したことによって、そのコストを吸収するかたちができたということです。また、書店のほうも両方を扱う習慣が定着しました。

現在の書籍流通システム

—— 二〇一〇年、二〇年という幅で考えると、出版流通システムは非常に進化していると思うのですね。デジタル技術などを取り入れることによって、プロモーションやマーケティング技術も出版社・取次・書店それぞれが向上している。にもかかわらず出版物の売り上げは年々落ち込んでいます。この原因というのは、出版流通の中にあるのか、あるいはもっと外側の、例えば人々の読書傾向などにあるのか、そのあたりどのようにお考えですか。

本の読まれ方が変わってきているというのは当然あると思います。ただ、これは博士課程で取り組もうと思っているテーマと関連しますが、今おっしゃっている出版流通というのは新刊流通に限った話なのですね。それ以外にもアマゾンのマーケットプレイスや古書などもあるわけですから、それらを含めて、すなわち世の中の全体を捉えて流通と見なければなりません。おそらくスペースの問題などによ

り、個人の家のの中では本は圧倒的に減っていると思います
が、それは本を読まないということではなく、図書館で借
りる、あるいは古書などでリサイクルして、逆に循環する
ような仕組みになってきているかもしれない。その意味で、も
う少し全体像をよく見たうえで議論していく必要があると
思います。一九九六年のピークから確かに売り上げは落ち
ている。これは確かなことですが、そのことと本の流通の
ことは少し違うのではないかと思います。

——取次ルートでの売上減だけを以てマイナスの評価を
することはできないということですか。

そうですね。マイナスの評価もできないし、たぶん有効
な策も打てない。新刊流通業界の中での施策というのはあ
るわけですが、その比率・比重というのは年々下がってい
る気がします。書籍全体の流通の中での新刊流通の比率が
下がっているのです。出版社・取次・書店という業界の三

角形の構造の外側はものすごく大きくなっている気がす
る。この三角形は縮小しているのですが、そこだけ見てい
ても絶対に見えてこない。重複になりますが、インタート
ット書店やブックオフの登場によって、既刊本の価値がク
ローズアップされてきたと思います。たとえば最近、都市
部の若い人たちを中心に盛んになっている古本カフェや、
一箱古本市のような、業界の外側の流れは、こうした文脈
から理解する必要があります。

——先ほど話されたように、歴史的には書籍流通が雑誌
流通に吸収され、そのことはプラスとマイナスの両側面
があると思います。ただ、書籍流通のコストを雑誌流通
に肩代わりしてもらおうという仕組みが続いていたわけ
ですが、最近の雑誌の不振により、その部分を支えられな
くなっているのが今の状況だと思っております。その際に、
書籍流通が雑誌流通から自立してやっていける可能性は
あるのでしょうか。

討議と人権

ハーバーマスの討議理論
における正統性の問題

内村博信 著

グローバル化が進む世界に
潜むアポリアを見極めながら、
ハーバーマスの「世界市民法」
の概念を構築する討議理論
と人権の関係を糾す。

◆3990円

ことばと精神

粟津則雄講演集

日本の近代詩人たちを中心に、
その生涯と作品を熱い共感と
純達の分析力で読み解いた、
著者初めての講演集。

◆2520円

フォトネシア

眼の回帰線・沖繩

仲里 効 著

批評的視点から切り込む沖
繩発の初めての本格的写真
家論。

◆2730円

ヨーロッパ法 と普遍法

諸世界システムの共存

河上倫逸 著

文化の多様性と等価性を認
める真に普遍的な法は成立
しうのか。

◆2520円

応答する呼びかけ

言葉の文学的次元から
他者関係の次元へ

【ポイエーシス叢書58】

湯浅博雄 著

未知なる他者との対話のあ
やうさを解き明かす。

◆2940円



未来社 〒112-0002

東京都文京区小石川3-7-2

tel 03-3814-5521

http://www.miraisha.co.jp/

★出版図書目録無料連星いたします★

※価格は税込

それも先ほどの話に関わってくるのですが、射程は相当広くとっていくか、逆にものすごく限っていくか、どちらかで生き残る道はないでしょう。射程を限っていく場合は結局、「欧米並みに書籍の価格を上げよう」ということになるわけですし、現に取次はそのようなことを言い始めています。雑誌で支えきれないから本の値段を上げてくれという話になるわけです。書籍流通だけを自立させようとする、そこにしか解決策はないですね。

そうでなければ、射程を相当広くとって、先ほどの社会的な循環ぐらいいまで視野に入れて、その中でどのくらいのコストパフォーマンスをあげられるのか、考えていくことになるのかもしれないですね。つまり、雑誌に代わるパトロンを探すということです。

オンライン書店について

——オンライン書店が書籍の流通に及ぼした影響と今後
に及ぼす影響について、どのようにお考えでしょうか。

『書棚と平白』に書き忘れたのですが、なぜアマゾンが日本のオンライン書店でトップなのかといえば、それが世界一、日本一の書店だったからという理由ではないと思います。というのは、規模や知名度ならバインズ&ノールですし、紀伊國屋書店だったりするわけです。それを超えてなぜアマゾンがオンライン書店のトップになったかと

いうと、もともと洋書をアマゾンで買う研究者や編集者がいて、彼らのあいだでは口コミでアマゾンを利用することが広がり、購買パターンが確立してしまっただけ。その利便性を充分分かっていたので、その層が和書にも同様のことを求め、圧倒的にアマゾンを使い続けるのだと思います。

ただ、それがすべての人に及ぶとは思えませんので、二層化していくのではないかと思います。非常に部数が少ない本、あるいは専門的な本などが、検索を利用するユーザー層と相性良くアマゾンでの売上につながると思います。

——現在の出版流通の枠組みの中で考えますと、アマゾンの登場によって取次が変化せざるを得なかった部分はありますか。

注物流をビジネスにするというモデルを本格的に展開したのは、やはりアマゾンだと思います。注物流へのリスクエースは昔からあったわけですが、お金が掛かるのでやらなかったわけですね。それはサービスマンだ、つまり料金の上乗せもしないで一〇〇〇円程度の単価の安いものを直送するのは、サービスマンでやっているにすぎないと考えていたのです。そこにアマゾンが登場したことにより、ビジネスにすることが迫られたのです。これが一番大きかったです。その結果、取次は大規模な設備投資をするわけです。

今後の研究テーマについて

最後に、今後の研究テーマについて話をお聞かせください。

ふたつほどありまして、ひとつは先ほど申し上げたように、社会全体の中での書物の循環、広義の意味での流通ということを考えていると思います。今興味を持っているのは古書の取引です。今はまた新刊書と古書の併売という話が出てきていますが、歴史的には、新刊と古書の売り方が未分化であったようです。本屋といえば新刊も古書もあり区別がなかった時代から、区別するようになり、そしてまた一緒になるという過程があるようなので、そこをもう一回レビューしていきたいと思います。

もうひとつは、流通システムの中である意味での統制についての研究です。それは戦時の統制とは違う意味がおそらくあると思うのですが、自浄作用というか、コントロール作用みたいなものが何かあると思うのです。取引形態を統制することによって商品の露出が変わるわけですから、そういうものが相当長い年月続いていくということは、それは単に取次が大きく権力的な立場にあるということではなく、メディアの流通のなかで何らかの合理的な普遍性があるような気がするのです。それが何なのかを知りたくて、今は満州国の書籍流通を調べています。これは日配設立の前年にモデルとして出来るのですが、日配が成立していく

プロセスで、逆にこの満州の書籍流通が反面教師になっていくのです。満州や朝鮮で失敗している部分があり、それが反面教師として日配のシステムに反映されるのです。その失敗の原因はおそらく取次との関係にあるのですが、そのあたりを調べることで何か見えてこないかと考えています。

〈書物復権〉の試み——8 出版社共同事業と東京国際ブックフェア共同出展

持谷寿夫（みすず書房代表取締役）

書籍、とりわけ専門性の高い人文系書籍の販売の困難さは年を追うごとに増えています。少部数の発行、読者と出会うまでに必要とされる長い時間、もともとの特性に加えて、出版不況といわれる外的環境の悪化は、ますますこうした書籍の発行の負担を大きくしています。専門性の高い出版物を発行していく限り、困難は覚悟のうえですが、出版社の機能が企画・編集だけでなく販売までを含み、自らが発行した書籍を必要とする読者に届ける責任がある以上、現状を嘆くのではなく、その時代に合わせた新しい販売施策を産み出す必要はいつの時も存在しています。

一九九六年、専門性の高い書籍の刊行を主とする4つの出版社（岩波書店・東京大学出版会・法政大学出版局・みすず書房）の営業担当者が集まり〈書物復権〉の活動は始まりました。共通の問題意識のもとでまず考えられたのは、各社が、苦心している既刊書の販売を共同で実施できないかということ。新刊書には各社ごとの戦略があり、共同歩

調はとりにくいですが、既刊書の提案であれば、専門書分野の品揃えに苦勞している書店にとっても役に立つものでもあり、受け入れられやすい。幸い、専門書の分野での販売実績をもつ取次店、鈴木書店の協力を得ることができ、紀伊國屋書店・勁草書房・白水社・未來社の4社の参加もえて〈書物復権〉の活動は始まりました。

共同復刊

既刊書の売行不振とともに各社が頭を痛めていたのが品切書の多さ。一定の需要があれば、重版することは可能ですが、確実に売れる、という見込みがたなければ重版しにくいという現状のなかで、共同復刊の事業は重版できずにいる各分野の古典を、読者からのリクエストによりよみがえらせる企画として一九九七年より開始されました。以来多くのメディアにも紹介され、現在の〈書物復権〉の活動の大きな柱となっています。二〇〇九年までにこの事業

〈書物復権〉共同復刊実施点数

年	点数	冊数	参加社数	特記事項
1997	23	23	4社 (岩波書店、東大出版会、法政大学出版局、みすず書房)	
1998	39	41	7社 (勁草書房、白水社、未来社参加)	読者リクエスト開始、テーマフェア「20世紀の光と影」同時開催
1999	40	41	8社 (紀伊國屋書店参加)	
2000	42	44	8社	
2001	42	44	8社	
2002	39	42	8社	復刊テーマ「70年代の豊かな果実」
2003	46	48	4社	復刊候補書籍278点過去最大に著者アンケート同時実施
2004	41	47	8社	復刊テーマ「図書館の未来と書物復権」
2005	43	44	8社	復刊テーマ「書物復権と書店」
2006	51	55	12社 (10周年記念 新曜社、創元社、筑摩書房、平凡社 特別参加)	
2007	44	48	9社 (新曜社参加)	
2008	42	44	8社	
2009	40	44	8社	
計	532	565		

によって復刊された品切れ書は五〇〇点を超えており、単独では難しい品切れ書の復刊企画として、現在も継続されています。

「本」のある場所で 編集者と語る集い

既刊書の促進や品切れ書の復刊とともに、参加出版社の力を共同で生かすことのできる各種事業を〈書物復権〉は行っています。一九九九年〜二〇〇〇年にかけて全国8書店の協力を得て実施された――「本」のある場所で、編集者と語る集い――は、本を作る編集者と読者との直接の対話を、書店という「本」のある空間で実現しようという意図で企画されたものです。普段、直接にふれあうことのない読者と編集者とのコミュニケーションは、本と読者との距離を縮める新しい試みとして各地域のメディアでも紹介され反響を呼びました。

開催書店

大阪市 ジュンク堂書店難波店／長野市 平安堂新長野店
 ／前橋市 煥乎堂／仙台市 東北大学生協文系店／京都市
 ジュンク堂書店京都店／郡山市 岩瀬書店富久山店／さい
 たまし 須原屋本店／名古屋市 名古屋大学生協南部店

紀伊國屋セミナー〈書物復権〉

二〇〇五年から二〇〇七年にかけて実施されたのが紀伊國屋書店との共催による紀伊國屋セミナー〈書物復権〉。

各出版社の刊行に関連する著者を講師に招き、本についての連続したセミナーには、多くの読者が参加し、「本」とその周辺をめぐって刺激的なディスカッションが繰り広げられました。

二〇〇五年実施セミナーから

「本の底力」 宮下志朗・鹿島茂・今橋映子

「いま天皇・皇室を語る」 小熊英二・島田雅彦・原武史

「外国語上達法くまず日本語から」 三森ゆりか

「学力崩壊時代に読書と教育を問う」 亀山郁夫・小谷真理・佐藤良明・巽孝之

「闇市派落語者の弁明」 平岡正明・田中優子・金原亭馬治

「利己的な遺伝子は眠らない」 日高敏隆・長谷川眞理子・瀬名秀明

「日本美術の楽しみ」 赤瀬川原平・山下裕二

「デリダの明日」二〇〇五年／危機と哲学」 小林康夫・鶴

銅哲・西山雄二・萱野稔人

「詩と国家」 菅野覚明・熊野純彦

東京国際ブックフェア共同出展

東京国際ブックフェア（TIBF）への共同出展は二〇〇四年から。個々の社での出展はそれ以前も行われていましたが、〈書物復権〉8社の会としての共同出展はこの年から。TIBFへの出展は、読者との直接交流や謝恩販売の場として、版權売買や書店への販売促進のビジネスの場

として、と性格の異なるさまざまな利用の仕方がありますが、専門書出版社が単独で出展するには、経済面も含めて負担が大きく、成果を得るために必要な、事前の準備や、会期中のブース運営、セミナー・サイン会などのイベントの実施などは小人数の出版社ではとてもまかないきれません。とはいえ、団体での共同出展は、刊行書の一部を展示するにとどまり、自社のアピールはほとんどできないため、来場する読者や関係者の期待にはこたえられず、出展の意義は大きく薄れます。おそらく多くの専門書出版社が同様の思いを抱いているのではないだろうか。

〈書物復権〉8社の会という枠組みを利用した共同出展は、このTIBFという機会を積極的に利用するための二つの課題、各社の独自性の発揮と、個々の負担の軽減、の解決のための有効な出展方法として考え出されました。二〇〇九年までの五年の継続出展により、来場される多くの方々から評価をいただいていることは間違いありませんし、ともすれば、「本」以外の展示やセミナーが増えがちなこのフェアを、あくまで、自社が刊行してきた「本」を見せ、自社をアピールする場として機能させたいという出版社本来の思いも叶えられています。ブースの展示は基本的には各社独自で行い、運営する。別途共有スペースを持ち、販売や共同復刊での復刊書を展示する。8社という出版社の数や規模、展示する書籍の性格も共通することなどの面からもさらに来場者と各社との距離を近づけることに

松川六〇周年
回想の松川弁護
 大塚一男／著
 今年はあの「謀略の夏」から60年にあたる。弁護士としての第一歩を松川からはじめた著者が、語り遺したことなどを、情感を込めて語り尽くす。
 ■2,625円

教育と格差
 なぜ人はブランド校を目指すのか
 橘木俊詔・八木 匡／著
 教育と就職、昇進の機会の関係など、教育と格差にまつわる諸問題を、独自のデータにもとづき実証分析。
 ■1,890円

はしごを外せ
 蹴落とされる発展途上国
 ハジюн・チャン／著
 横川信治／監訳、訳
 ■2,520円

魚の経済学
 市場メカニズムの活用で資源を護る
 山下東子／著
 ■1,785円

**アフリカ問題
 開発と援助の世界史**
 平野克己／著
 ■3,465円

微積分 名作ギャラリー
 ニュートンからルベーグまで
 ウィリアム・ダンナム／著
 一楽重雄・實川敏明／訳
 ■2,625円

医学探偵 ジョン・スノウ
 コレラとブロード・ストリートの
 井戸の謎
 S・ヘンペル／著
 杉森裕樹・大神英一・
 山口勝正／訳
 ■2,940円

日本評論社
 〒170-8474 (前税込)
 東京都豊島区南大塚3-12-4
 TEL:03-3987-8621
 FAX:03-3987-8590
 http://www.nippsy.co.jp

役立っています。会期中に行ったイベントでは二〇〇四年に行った無料公開セミナー——〈書物復権〉書物の果たす役割——講師、法政大学 田中優子先生が印象に残ります。聴講者数に不安もあったのですが、大盛況。来場された図書館関係者や一般読者に対して〈書物復権〉をおおいにアピールすることができました。

また、共同企画として二〇〇七年より行っているものに、〈書物復権〉8社の会新企画説明会があります。首都圏の書店や取次店の担当者を招いて、今後自社が刊行を予定している新企画や刊行書の背景を、それぞれの編集者が説明する。共同で行うために時間の制約はあるのですが、自社の新企画の刊行の意欲や企画の意図を販売に携わる方々に直接に伝えることのできる貴重な機会であるとともに、発表する編集者にとっても得難い経験になっています。来場される書店の方々との懇親や情報交換もブックフェアならでは、ともいえます。

二〇〇九年の各社説明企画から(抜粋)

みずす書房 『フロム・ヘル』／未來社 『フォトネシア』
 『俳優の仕事』『出版のためのテキスト実践技法』総集編
 ／法政大学出版社 新叢書『サピエンティア』／白水社
 『倒壊する巨塔』『プーチンと甦るロシア』『チエチエン
 廃墟に生きる戦争孤児たち』『東欧革命1989』／東京大学
 出版会 『大人のための近現代史』『A Little American
 Universe』／勁草書房 双書プロブレマター 斉復刊
 紀伊國屋書店 『死の床で語る聖書の物語』『創造…地球上
 の生き物を救う』／岩波書店 『加藤周一』自選集

専門書出版社がTIBFに出展し、成果を得るためには、直接携わる営業部だけでなく、社全体として取組むことができるかどうか大きなポイントになります。展示販売も大事ですが、それは出版社にとってフェア活用的一部分でしかありません。編集者やその他の部署を含めた参加が継続して出展できるかどうかの鍵ですし、継続することが、さらに読者と出版社との距離を近いものにします。皆、慣

れない経験ですから、戸惑いも多く、疲れもありますが、書店人や図書館人、海外からの来場者、さらには本を求めてくる読者との直接の出会い、それだけで満足できるものでもありますし、目に見えない成果ももたらしてくれます。個々の社の負担を軽減しながら、最大の成果を得る。共同出展には、また違う方法もあるのかもしれない。共同でできるイベントもまだあるはず。次年度以降も、新しい可能性を模索しながら出展していきたいと考えています。

最後に

〈書物復権〉は、この共同事業を立ち上げたときに作成した文中に使われたことばですが、失った権利を取戻すという意味ではなく、一冊の書物を必要とする読者に届ける責任が出版社にはあり、そのための共同が必要という意志が込められたことばです。参加各社の独自性を生かしながら新しい協力のかたちをこの先も試みていきたいと考えています。

関西の専門書市場とマーケティング戦略

土橋由明 (大阪大学出版会)

はじめに——出版業を取り巻く現況

(株)出版ニュース社によると、二〇〇八年度末の時点で、三〇年ぶりに全国の出版社の数が四〇〇〇社を下回ったという。しかも新たに出版社を創業したのは、わずか九社のみであった。しかしこの数字も近年業界が置かれている状況を目の当たりにすると、大した驚きにもならない。業界紙面に目をやると、昨年から今年にかけて相次いで出版社が倒産に追い込まれ、もはやビジネスとして魅力のなくなった出版業へ足を踏み入れる者も少なくなってきたというふうに思われる。

このように業界全体が縮小する中で、当会のような「関西」・「専門書」という特殊性をもった出版社は何に期待し、何を行えばその活路が見出せるのか。

その二つの特殊性をキーワードに、現況と今後の展望について言及したい。

「東高西低化」したマーケット

ほとんどの産業がそうであるように、われわれ出版産業においても、「東高西低」という地域格差モデルはすんなり当てはまるように思われる。

コンピュータ出版販売研究機構のサイト内に掲載されている「二〇〇八年度コンピュータ書売上ランキング」【全国(上位二〇〇店)】の数字をもとに、各地域での販売部数比率を計算してみた。出版社視点ではあるが、大別すると「東日本(中部地方含む)」七四%、「西日本」二六%と圧倒的な市場の格差が存在している。また地域比較では「関東」は六三%、「関西」は一七%、都市比較では「東京都」四六%、「大阪府」一一%であった。もはやこの「東高西低」の「東」とは、「東京」と読み替えた方が適切であるかもしれない。対象となった加盟七社の出版社は東京に本社を置いていることや、取り上げた分野の影響もあるだろうが、

それを差し引いたとしても、一定の指標にはなるであろう。これは実際に、大阪を拠点として活動する当会においても肌で感じていることであるが、数字上の格差だけではなく、業界内の情報伝達や取次機能・書店仕入部の東京一極集中など、そこに内在している格差は予想以上に大きいと思われる。

「関西」という市場の可能性——大阪を中心に

ではそのような格差の中で、さらにマーケットは縮小し、出版産業の辺境の地である関西で活動する出版社はますます苦境に立たされて行くのであろうか。私は少し違ったようにとらえている。

ここ数年、この「東高西低化」した既存のマーケットに対して、関西は多方面から少しずつ、そして確実に新しい動きが芽生えてきている。

出版産業でみると、昨年から大型書店の新規出店・店舗増床などが行われた。主な例として、「ブックファースト阪急西宮ガーデンズ店」、「喜久屋書店檀原店」、「ジュンク堂書店難波店」の新規開店、「ジュンク堂書店ヒルトン梅田店」増床（2フロアへ）などが挙げられる。またネット書店大手の Amazon.co.jp の物流サービスを手掛けるアマゾンジャパン・ロジスティクスは、関西の物流拠点となる「アマゾン堺FC」を開設し、サプライチェーンの強化に乗り出した。鋭敏なビジネス感覚をもつ同社が関西へ進出

してきた事実は特に注目すべきである。

他の業界に目をやるとどうであろうか。

関西産業・経済界においても、近年大きな動きが見られるようになってきている。大阪では大企業による設備投資として都市区画整理事業が盛んに行われ、JR大阪駅北口に広がる操車場跡地（通称・梅田北ヤード）には、商業・教育・文化・自然などが融合した新たな複合施設・拠点の建設が計画されている。同じくJR大阪駅には三越伊勢丹ホールディングスも進出が予定され、間もなく梅田界限は百貨店激戦地区となる。また大阪府以外では、特に滋賀県（南部）において、その交通の利便性から、近年大阪や京都のベッドタウンとして宅地開発が急速に進んでいる。それにとまない、大学キャンパスの新設、またマンシヨンの建設などが進み、全国でも数少ない人口増加県として成長している。事実、多くの書店が滋賀県内への進出を始めている。今後もしマンシナルチェーン店など、さらなる進出が期待されるであろう。

教育面においても、昨年慶應義塾大学が大阪中之島へサテライト拠点を設置したように、関西での人材確保、教育基盤の確立など、東京から関西への「知の流動」が起こりつつある。

いずれの業界においても、飽和状態化しつつある既存マーケットから新たな金脈を探すべく、関西（特に大阪）への「西部開拓」が行われようとしているのではないだろうか

か。

現在大阪府では、「地方分権」・「道州制」を見据え、行き詰りつつある「ヒト・モノ・カネ」の「東京一極集中化」からの脱却を図るとともに、今後ますます経済交流が深まるであろうアジア諸国との玄関口として機能すべく、「陸海空」交通網の整備なども計画している。今回の政権交代により、ますますその速度が増す可能性もある。既存の経済システムが変われば、われわれ出版産業の現況も大きく様変わりするであろう。

在阪出版社としては、ぜひともその可能性に期待しつつ、変化に対応できるような準備をしておきたい。

専門書ビジネスとは

今年八月に開催された大学出版部協会夏季研修会にて、「関西の書店状況」という題目で発表する機会があった。その資料を作成する中で、書店担当者から専門書について、出版社と書店との間にはどのようなビジネス感覚のもとで

取引が行われているか、現場の声を伺うことができた。当会の場合を例に、出版文化論とは一線を画したビジネスとしての専門書販売について考察する。

「高い・難しい・売れにくい」はチャンス

今まで取引のない新規書店へ営業に行った時の話。専門書は「高い・難しい・売れにくい」といわれることが多い。確かにそのとおりかもしれない。

二〇〇九年一〇月現在までに、当会から刊行された専門書カテゴリーの書籍平均価格は五六〇〇円である。内容もその分野に特化したものであり、それを専攻・研究していない一般読者からは、やはりかけ離れた存在といえる。最後の「売れにくい」についても多少の差こそあれ、当会の一般書カテゴリーと比べると、実際に棚での動きが鈍いことは否めない。

さてこれだけを見ると、専門書ビジネスを根底から否定するように受け取られるかもしれないが、私自身としては、

名 著 復 刊
ミネルヴァ・アーカイブズ

コミュニテイ

R・M・マッキーヴァー著 中久郎／松本通晴監訳 ● 社会学的研究：社会生活の性質と基本法則に関する一試論 8400円

全訂 社会事業の基本問題 孝橋正一著 8925円

社会福祉実践の共通基盤

H・M・パートレット著 小松源助訳 基本的文献。8400円

旧制高等学校教育の成立

寛田知義著 形成過程を構造的に解明。8925円

日本私有鉄道史研究

中西健一著 ● 都市交通の発展とその構造 10500円

● 既刊 ●

文化と社会 1780—1950

R・ウィリアムズ著 若松繁信／長谷川光昭訳 6300円

船場 風土記大阪

宮本又次著 8400円

江州中井家帖合の法

小倉榮一郎著 10500円

木地師支配制度の研究

杉本 壽著 18900円

「鎖国」という言説

大島明秀著 ● ケンペル著・志筑忠雄訳「鎖国論」の受容史言説史研究の決定版。6300円

「ミネルヴァ日本評伝選」

額田王

梶川信行著 31500円

蘇我氏四代

遠山美都男著 29400円

桓武天皇

井上清郎著 27300円

ミネルヴァ書房

〒607-8494京都市山科区日ノ岡塚谷町1

TEL075-581-0296 FAX075-581-0589

価格は税込／宅配可（送料@380）

逆にこの「高い・難しい・売れにくい」は専門書出版社がもつ市場での競合優位性だと考えている。

企業が打ち出す様々な経営方針の中に、「価格戦略」と「ブランド戦略」という二つの戦略がある。「価格戦略」とは、大規模市場にて商品やサービスを低価格で提供し、より多くの顧客を取り込もうとするもの。ユニクロやマクドナルドなどがそうである。逆に「ブランド戦略」とは、特定の顧客層に高品質・高付加価値の商品やサービスを、それに見合った高価格で提供すること指す。おおよそ二〇〇〇人程度の小規模マーケットであり、その分野に特化した情報であるという高付加価値を含み、その価値に見合った高価格商品を提供する専門書ビジネスは、まさしく後者のモデルとなるであろう。

では果たしてこのビジネスモデルは、実際書店現場において、どのようにとらえられているのか。書店全体の経営を担う店長やフロア長などの話を伺うと、「高い・難しい・売れにくい」といういわば専門書のマイナスイメージとは逆に、予想通り次のような回答が返ってきた。

専門書を展開するメリット

第一に専門書とは、「(価格が) 高い」がゆえに顧客単価も高く、「高収益率商品」であるということ。第二に、「難しい(専門的)」であるために、既存顧客層のさらなる掘り起こしと、新たなニーズを求める新顧客層の拡大につな

がるということ。そして最後の「売れにくい(棚での動きが鈍い)」については、その裏を返せば専門書の潜在顧客が少ないことを示し、ブランド戦略の基本である「商品が狭く売る」ことで、その価値や価格を高めて販売できることや、専門書の特性である長期間安定したトレンドで販売数が維持できること(ロングセラー)など、書店にて展開するメリットは十分あると考えられていた。

その中でも特に重要なものは、「一冊当たりの収益率が高い」という点であろう。たとえば、価格が四二〇〇円のコミックス一〇冊を販売した場合と、価格が四二〇〇円の専門書を一冊販売した場合とは、一見売上結果は同じようにみえるが、商品管理費、人件費などのコストを考慮すると、当然後者の方が収益率は高くなる。

いま書店現場では、「返品率」を下げることもよりも、この「収益率」を上げることが重要視されている。大量返品・大量返品を減らすことは勿論のことだが、それと並行して、いかに「高収益率」な書籍を販売できるかがポイントとなっている。それは「(売れると) 高収益率」な商品を扱う専門書出版社がもつ強みであり、今後も競合優位性を維持するための重要なファクターであると考ええる。

生き残る手段として——「ブランドマーケティング」

では当会のような地方の小規模専門書出版社が、今後生き残ってゆくには何が必要であるか。それは自らの「ブラ

ンドイメージ」をより明確に構築することが必要であると考える。専門書出版社であり、前述の「ブランド戦略」型に属してはいるが、様々な方面でコモディティ化が進む中、さらに差別化された「ブランドイメージ」の構築、つまり編集サイドからは高品質・高付加価値商品（＝内容の確実性、独自性、創造性が高い書籍）を、営業サイドからも高品質・高付加価値サービスやマーケティング戦略などを考案し、市場へ浸透させていく必要がある。

幸いなことに、当会はずでに「大阪大学」というある種のブランドイメージの枠組みの中に身を置いている。しかしこのブランドが持つ既存のイメージに寄りかかるだけでは、出版社のもつクリエイティブな側面や、有益な情報を市場へ反映させることはできない。「大阪大学出版会」というフィルタを通して、常に新しい「+α」を創出し発信して行く必要がある。

このように「関西」・「専門書」という自らが置かれているポジションと特殊性を逆にチャンスととらえ、時間はあるであろうが、市場において確固としたブランドイメージを構築できるよう、様々な戦略を模索して行きたい。

おわりに——いま出版社がすべきこと

出版不況といわれ、早一〇数年が経過した。ベストセラーによる一時的な売上高の浮揚はあるものの、全体としては右肩下がりである。その間出版業界内でも、「返品率の

減少」、「責任販売制の導入」など、その打開に向けて様々な議論や取り組みが行われてきた。どれをとっても重要な課題であり、真剣に取り組んでいかなければならないことである。しかし、それは本来優先すべきである顧客側からはどうもかけ離れた、いわば内輪の議論であると感じることも多い。まずこの出版不況の原因となっているのは、本というメディアからの「顧客離れ」が引き起こしていることを改めて自覚するべきではないだろうか。

ではそもそも出版業を営む上で、「顧客」とは一体誰を指すのか。当然のことながら、出版社が提供する製品・サービスに対して価値を見出し、その対価を支払う「読者」であるといえる。自社にキャッシュをもたらすという意味では、「書店」、「取次会社」もこの「顧客」に当てはまるかもしれないが、商品の最終消費者である「読者」は、本来の意味での「顧客」と位置付けられるべきであろう。

今日まで出版社は「製造業的側面」において、本というメディアを通じ、様々な創意工夫を凝らし、新たな知識・概念・喜び・驚き・感動などを顧客へ提供してきた。そしてそれは、今後も出版社の柱として継続・発展させて行く必要がある。しかし一方で、情報受発信や他の「サービス業的側面」については、果たして顧客側が望むようなニーズを提供・吸収できてきたのだろうか。いま出版社に欠落していることは、「製造業的側面」よりもむしろ、この「サービス業的側面」における対顧客意識ではないだろうか。

インターネット、情報機器の普及により、出版社と顧客との双方向コミュニケーションが容易となった現在、出版社は従来行ってきたような川上からの一方的な情報発信スタイルを見直し、また書店や取次会社に依存してきた対顧客サービスやマーケティングにも積極的に参加していく必要があると思われる。そして、顧客側が持つ潜在的なニーズを取り込み、自らがもつ出版機能を駆使し、それを咀嚼・媒介・発信することで、いままでにはなかった新たな可能性を生み出すことができるかもしれない。

出版社とは一体何であるか、そして顧客に何を提供できるのか、今まさにその存在意義を再考しなければならぬ時に直面している。

(一) コンピュータ出版販売研究機構「コンピュータ書籍 売上ランキング」【全国】二〇〇八年四月～二〇〇九年三月」http://www.computerbook.jp/images/computerbook_jp/cpu/65/CPU2008_zenkokupdf

大型チェーン書店の台頭と独立系書店の行方——ポーランド出版事情

橋元博樹（東京大学出版会）

はじめに

今年の五月、出版文化国際交流会の専門家派遣プログラムでワルシャワを訪問した。このプログラムは各国の国際ブックフェアに出版物とともにスタッフを派遣することによって、日本の出版文化を世界に広めようという趣旨で取り組まれているものだ。出版文化国際交流会の会員である当大学出版部協会も毎年一名ないしは二名を専門家として派遣しているが、この春開催されたワルシャワ国際ブックフェアには、昨年の大阪大学出版会の落合祥堯氏につづいて私が派遣されたというわけである。

「専門家」とはいささか大げさで、こそばゆくなる表現であるが、実際に海外のブックフェア会場に日本から派遣されると、現地の人々からは容赦なく専門家として対応される。なにしろ、ワルシャワブックフェアには日本の出版社が出席しているわけでも商談に訪れているわけでもな

い。その期間、その場所にいる唯一の日本の出版関係者となるのだ。大使館職員がポーランド語で現地の出版人らに私を紹介するときに唯一耳に入ってくる「スペシャリテ」という単語の響きに恐縮してしまうことしきりであった。

こうした緊張感も含めて、ブックフェア開催の四日間の経験はなにもものにもかえがたいものであり、その貴重な場を提供してくださった出版文化国際交流会の皆様に改めて感謝の意を表したい。

さて、そこでの経験と取り組みについては、出版文化国際交流会の会報一八八号 (<http://www.or.jp>) にレポートを掲載させていただいたのでそちらをお読みいただくとして、ここではポーランドで見聞した、あるいは持ち帰った資料で調査した書店事情について書いておきたい。

ポーランドの出版事情は日本にいてはほとんど把握することができない。理由のひとつは人口三八〇〇万人という小さな市場では、日本の出版物を翻訳輸出するにはビジネ

ス上のメリットに欠けるからだろう。だからというべきか、このほとんど明らかにされていないポーランドの書店状況の一端を改めて報告するのもまったく意味のないことではないと思う。

エムピック、トラフィック・クラブ、プルス

ワルシャワの中心、中央駅や郵便局やデパートなどが集積している地域の、大通りに面した交通の便のよいところに大型書店エムピックがある。エムピックは全国におよそ一〇〇の店舗を持つポーランド最大のチェーン書店である。本店と思われるこのワルシャワの店舗は3階建ての広々とした建物に雑誌、書籍、文房具、CDを取り揃えた複合店。さらに3階にはカフェを併設しており、購入前の書籍もここで読むことができる。窓の外に聳え立つ文化科学宮殿を眺めながらの読書はワルシャワならではだ。一方で、店内の広いスペースには書棚が整然とジャンルごとに並べられており、日本でもよくみかける大型店舗のレイアウトとそれほど変わらない。1階は雑誌のコーナー。もともとポーランドでは書籍流通と雑誌流通は別であり、書籍は書店で販売され、雑誌や新聞は駅などのニューススタンドで販売されている。だが近年はエムピックのような大型書店が新聞・雑誌を扱い始めた。つまり書籍流通と雑誌流通の相乗りが始まっているのである。

入口正面にはスタニスワフ・レムの作品が多面で陳列さ

れていた。日本で言えばベストセラーが陳列されている最も人の目に付くスペースに、ポーランドが生んだ世界的なSF作家とはいえ、こうした難解な書籍が堂々と販売されているのには驚かされた。

表通りから路地に入り、映画館やレストランが軒を連ねるにぎやかな繁華街を歩くと、もう一つの大型店トラフィック・クラブが見えてくる。中心が吹き抜けになっている少々薄暗い照明から醸し出される高級感、エムピックの大衆的な明るさとは対照的である。書籍の陳列方法もさまざまに工夫が施されており、ポーランドで訪問したどの書店より綺麗で居心地が良い。大型書店ではあるがチェーン店ではなく、他にはこのワルシャワ以外に1店舗あるのみである。

学術書を主に扱うプルスは、繁華街からはすこし離れたワルシャワ大学正門前に位置する小規模な独立系書店である。五〇坪程度の敷地に地上1階、地下1階の2フロア。石造りの堅牢な建物を一歩なかに踏み入ると円形の柱やアーチ状の梁がいたるところに目に入り、小さな教会のなかにいるような気がしてくる。かつて観光の合間に立ち寄ったパリのソルボンヌ大学の前にはカンパニーという哲学・思想の専門書店があったが、どの地域にいつても大学前にはこうした専門書店があるものだ。世界中で苦境に立たされているといわれている専門書販売の現状であるが、こういう書店と出会うと元気づけられる。



トラフィック・クラブ店内。中心部は吹き抜けに。

だが、このように活況なのは大都市部の一部の大型店、とくにエムピックのようなチェーン書店だけであり、地方の独立系書店の経営状態は決して良好とはいえない。

ポーランドの書店事情を概観してみよう。

書籍の販売ルートは、書店店頭以外にも通信販売や訪問販売、インターネット、出版社直販など、日本と比べるとずいぶん多様である。市場全体の書店シェアは一九九五年の六二%から二〇〇七年の三九%にまで急激に下がっている。店舗数でも一九九九年の二九〇〇店から二〇〇七年の二五一〇店と減少しており、現在でも撤退・廃業は止まらないといわれている。だが、ハイパーマーケットやショッピングモールの書店、そしてエムピックのようなナショナルチェーン書店は業績を伸ばしているというから、苦戦を強いられているのは、ようするに地域の独立系書店である。また書店店頭以外の流通チャネルとして注目を集めている

のは新聞・雑誌流通ルートであるニューススタンドでの販売（一一%）である。先ほど述べた雑誌と書籍流通の相乗りがここでも見られるのだ。そして多くの主要国で独立系書店の経営を脅かしているオンライン書店の伸張もまた顕著だ（一〇%）。

つまり大型チェーン書店の台頭と他の販売ルートの伸張にともない、地域の独立系書店の存在が危機に晒されているのである。

ハリー・ポッターと定価販売制度

二〇〇三年一月、ポーランドの出版業界ではある協定が結ばれた。ハリー・ポッターの新作をカバープライスの一〇%以上の割引率で販売してはならないという取り決めだ。ポーランドには定価販売制度や再販売価格維持制度はない。だから本来であれば各店舗が自由に価格を決めることができるし、またそれまでの新作はそうようにして販売されているのだ。

当初は翻訳出版元とホールセラー数社による協定であったのが、後に2つの大手販売会社も参加することによってこの協定の及ぼす範囲はマーケットシェアの八〇%を超えた。民間企業同士の協定といっても相互に販売価格を報告しあう義務を伴うために実質的な強制力を持つ。その結果、新刊『ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団』は、前作『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』よりも二〇%ほど高い

販売価格となった。

この協定は出版業界に波紋を投げかけることになる。政府OCCP（公正取引委員会）はこの協定を独占禁止法に抵触するとみなし、参加した版元と販売業者に罰金を課した。自由主義市場を標榜するポーランド出版市場では出版社が取次や小売などの販売業者の販売価格を拘束することは禁じられているからだ。それでも、強い販売力を背景とした大手チェーン店の交渉力に危機感を感じた関係者らによるこの協定については、業界内外から支持する声もあつたという。なによりもこうした事情の背景には大型書店エムピックの大幅な値引きや出版社に対する無理な価格交渉などがあるからだ。

このハリー・ポッターの販売協定は違法とされたが、現在では政府、文化省の主導で法律に基づく定価販売制度を導入しようという動きがある。

ヨーロッパでは再販制度についての対応は各国様々である。ドイツでは一八八八年から存在している価格拘束制度を二〇〇二年には法律に基づく制度へと移行した。発行後二年以内は出版社による価格拘束が許されているというものである。フランスでは一九八一年にラング法が制定され、5%の値幅再販が行われている。ラング法とは、発行後二年を経過し、かつ最後に仕入れた時点から六ヶ月を経過した書籍に限って値引きを可能とする時限再販制度であり、ポーランドで制定されようとしている法律もこのラング法

をモデルにしたものになるだろうといわれている。そのほかオランダは二〇〇五年から、イタリアが二〇〇一年から、ポルトガルが一九九六年からそれぞれ定価販売制度を立法化している。一方で廃止している国もある。イギリスは一九九五年にNBA（正価本協定）による再販制度が事実上廃止され一九九七年には違法とされた。フィンランドは一九七〇年に廃止、スウェーデンは翌一九七一年に廃止している。またスイスでは二〇〇七年に効力を失った。

このようにヨーロッパ各国の書籍を巡る競争政策は国ごとに異なるものの、EUは二〇〇二年に加盟国内の書籍の再販制度導入を薦める報告書を採択した。文化政策上の観点から独立系の出版社や書店を保護するために必要であるというのがその理由である。したがって二〇〇四年にEUの一員となったばかりのポーランドの定価販売制度をめぐる議論もこの文脈上にあると考えられる。

しかし、再販制度の導入とはやはり時代を逆行する施策ではないか、という意見もある。とりわけ、わずか二〇年前に社会主義を放棄したばかりのポーランドにとって統制経済に対するアレルギーは未だに根強い。再販制度はこれまで幾度か議論の俎上上がったことがあるが、そのたびごとに反対が強く、現在にいたるまで実現されることはなかった。

書籍との偶然的出会いの場としての書店

「独立系書店の保護の為に定価販売制度は必要です」。ブックフェア会場でインタビュアーに応じてくれた出版評論家のゴビウツキさんはそう語ってくれた。彼によれば、業界内部に定価販売制度をもとめる声がしだいに強くなり、ようやく足並みが揃いつつある、数年後には立法化するというのだ。それほどまでに地域の書店の廃業は深刻であるという。

オンライン書店や通販の売上は伸張しているが、だからといって読者にとって書店が不要というわけではない。多様な書籍に対する読者のアクセスを可能とするためには、やはり目的買いのみに適したオンライン書店だけでは限界がある。立ち寄った書店の店頭で、はじめて見かける書籍と偶然出会う環境が確保されてはじめて、書籍への幅広いアクセスが保障されるのである。

ただし、地方の独立系書店の淘汰と再販制度の因果関係については冷静な考察が必要とされる。独立系書店の廃業は再販制度の有無とは関係なく、むしろインターネットの発達などによる市場環境の変化が大きいのではないかという議論もある。実際、再販制度のある日本でも地域の独立系書店の廃業は進んでいる。地方の老舗書店に以前のような勢いはなく、主要な地方都市を訪れても大都市に本拠地を置くナショナルチェーンの看板が目立つのは、私たちに

もすで見慣れた光景となっている。

民主社会が成立して二〇年目を迎えるポーランドでは、書籍に関するどのような競争秩序をつくりだそうとしているのだろうか。数年後に制定されるといわれている定価販売制度が、独立系書店の未来を、ひいては読者の書籍へのアクセスのありようを左右する重要な法律となることだけは確かだ。

参考文献

- Biblioteka Analiz *BOOK MARKET IN POLAND* (2007)
椋善登「諸外国の書籍再販制度」(「インフォレンス」no. 699, 2009. 4)
その他、ポーランドの出版統計についてはポーランド出版学会のウェブサイトを (<http://www.instytytuksiazki.pl/en/itsite:41.86.php>)、ハリリー・ボッターの販売協定についてはOffice of Competition and Consumer Protectionのウェブサイトを (<http://www.odkik.gov.pl/en/>) などを参照。

大学出版部ニュース

神保町ブックフェスティバルの説明会に参加。お祭り気分の説明会最後に「アマゾンのブックリーダーが話題になっている。否定はしないが、書籍出版を頑張ろう」という中経・山本社長の話に少しホッと会場が出る。

数日後、大学出版部協会新刊速報を捲つて「カムブリッジ図書館蔵の一九世紀から二〇世紀初頭の出版物がペーパーバックで入手出来るという。お騒がせて野蛮なGoogleと比較して、電子の時代の何ともスマートで魅力的な仕事だろうと感心する。これは歴史の蓄積だけがなせる業ではない。やはりジェントルマンとカウボーイの違いだろうか？

このケンブリッジ大学出版局とはほぼ同じ手法でオンデマンド書籍を出版しているのが玉川大学出版部である。自己宣伝をしない玉川さんの取り組みを知る人は案外少ないかもしれないが、ケンブリッジと玉川さんのケーススタディを聞いてみたいと思う。その中で、「電子の時代の出版とは何か」を考えてみたいものだ。

北海道大学出版会

▼森本一夫編著『ペルシア語が結んだ世界—もうひとつのユーラシア史』（A5判・三一五〇円）ユーラシアの広大な「ペルシア語文化圏」で、ペルシア語がどのように使われ、その「威信」がどう変化したか。（スラブ・ユーラシア叢書7）

▼千葉芳広著『フイリピン社会経済史—都市と農村の織り成す生活世界』（A5判・五四六〇円）マニラとその周辺農村社会を一つの経済圏と捉え、商品流通と社会的労働の空間的広がりからその動態を分析。

▼坂口一成著『現代中国刑事裁判論—裁判をめぐる政治と法』（A5判・七八七五円）豊富な一次資料の渉猟をもとに実態を実証的に描き、「司法の独立」を糸口に、中国の裁判理念を析出する。

▼中村仁志夫・井上勝一編著『細胞診断学』（B5判・六三〇〇円）従来の科別ではなく、病気別に構成。画期的教科書。

▼樋口広芳・黒沢令子編著『鳥の自然史—空間分布をめぐって』（A5判・三一五〇円）今もっともホットな話題について、若手・中堅の研究者17名が紹介。

弘前大学出版会

▼『官立弘前高等学校資料目録—北溟の学舎の資料群—』弘前大学附属図書館編（B5判・九四頁・定価三九九〇円）目録類にありがちな無味乾燥な内容ではなく、本学所蔵の未公開写真を数多く掲載している。太宰治（本名・津島修治）を始め、多くの人材を輩出した官立弘前高等学校の貴重資料を一挙に目録化した。



▼『まち育てのススメ』北原啓司著（A5判・六四頁・定価五二五円）著者が見聞きし、また自らの豊富な事例を紹介しながら、「まちづくり」についてわかりやすく解説している。



東北大学出版会

▼桐原健真著『吉田松陰の思想と行動 幕末日本における自己認識の転回』(A5判・二九四頁・三一五〇円)

黒船来航にはじまる開国過程において幕末日本が経験したのは、単に他者としての欧米やアジアに対する認識だけでなく、「日本」という自己認識の大きな転回であった。この未曾有の転形期を劇的に過ごした、不世出の思想家・吉田松陰。没後一五〇年のいま、松陰の思想と行動を全く新しい視点から読み直し、同じく転形期にある現代日本を逆照射する。

▼大谷尚之著『産地組織のマネジメント―「コミュニティ」と「リーダー」が創り出す新たな地域農業―』(A5判・一七一頁・二一〇〇円)

知識も技術もゼロから始めた農業者たちは、いかにして新たな生産組織と産地を築き上げたのか？宮城県の小ねぎ産地を主たるフィールドとして、農業者による組織形成や協働の視点から、これからの地域づくりを考察する。成功事例のコミュニティ機能とリーダーの役割を明確に解き明かし、新時代の地域農業に有力な手がかりを与える注目の書。

流通経済大学出版会

▼『貨幣と市場の経済思想史―イギリス近代経済思想の研究―』小池田富男著(A5判・三九二頁・定価四二〇〇円)

現代の視点から、資本主義世界経済にとっての古典的金(銀)本位制の歴史的意義を解明。

景気変動過程の各局面における貨幣信用システムの役割とその理論について学説史的に分析し、預金創造等による、实体经济を上回る債権―債務関係の形成とそれを支える信用の崩壊により、「金融危機」が資本主義市場経済に不可避であることを明らかにした。

▼『農業立地変動論―農業立地と産地間競争の動態分析理論―』河野敏明著(A5判・六一〇頁・定価六三〇〇円)

農業経済の動態過程を立地論的に分析し、産地形成・産地間競争などの実践課題に対応するために「現状分析立地論」を、ダン地代関数の比較静学的効果と「孤立化法」の応用により展開する。また、我が国農業の動態変動過程を関連変動要因ごとに実証的に分析した意欲的労作。

聖学院大学出版会

▼阿部志郎・長谷川匡俊・濱野一郎『与えあうかわりをめざして―福祉の役わり・福祉のこころ』(A5判並製・八〇頁・六三〇円)

介護技術、福祉を実現する制度、それに伴う法律などを学び習得することが福祉教育で優先されがちである。しかし、本来人間にとって「福祉とは何か？」を根本から考えることも不可欠である。この「福祉とは何か？」を考えるブックレット・シリーズ「福祉の役わり・福祉のこころ」の第二冊目。

本書は「福祉」の原義が「人間の幸福」であることから、人間にとってどのような人生がもっとも幸福で望ましいものか、またそのために福祉サービスはどのようなあるべきかを福祉に長年携わっている著者たちによって論じられたものである。阿部志郎氏は、横須賀基督教会社会館館長として、また長谷川匡俊氏は、淑徳大学で宗教と福祉のかかわりを教育する立場から、濱野一郎氏は、横浜寿町での福祉センターの現場から「福祉とは何か」を語りかける。高校生、大学生、福祉の現場で働く方々にお勧めしたい本。

聖徳大学出版会

▼村井靖児著『音楽療法を語る―精神医学から見た音楽と心の関係―』（四六判・二八〇頁・二一〇〇円）音楽療法の第一人者である著者の、長年にわたる研究をベースにし、専門的でありながら一般の読者にもわかりやすい内容となっている。音楽療法は心身の病理に対してどのような効果をもたらすのか、音楽はなぜ心を癒すのか、心と音楽との関係を解き明かす。

▼森彪著『医における癒し―人間関係の形成のなから―』（四六判・二八〇頁・二一〇〇円）本書では小児科医の医療現場での経験をもとに、病氣と闘った人たちの実例が紹介され、著者との交流が描かれている。純粹な医学書ではなく、高度に発達した現代医学において人間の交流の必要性を強く訴えかけている。

▼高橋大海監修・Jソロイスト歌唱「親子で楽しむ唱歌集」（音楽CD・三四〇〇円）文部唱歌をはじめ、「春が来た」、「小さい秋みつけた」など文化庁「親子で歌いつづこう日本の歌百選」にも選定された二・三曲を含む全四二曲が収録されている。

麗澤大学出版会

▼伊東俊太郎著『伊東俊太郎著作集第二巻 ユークリッドとギリシアの数学』（七七〇円）ギリシアにいかにして厳密な論証数学が形成されたかを論じた著作、およびユークリッドを中心とする数学史の諸問題を取り扱った諸論文を収録する。

▼T・ピーチャム、J・チルドレス著／立木教夫・足立智孝訳『生命医学倫理（第五版）』（八一九〇円）バイオメディカルエシックスの最高峰を指し示す「現代的古典」。医療関係者必読の書。

▼服部英二著『文明は虹の大河』（六九三〇円）世界を舞台に「文明間の対話」の理念を発信してきた著者による文明論集。

▼清水千弘・高巖編著『企業不動産戦略―金融危機と株主市場主義を超えて―』（五四六〇円）。企業不動産戦略がもたらすものは何か、そして不動産金融システムの進むべき方向を、実務や政策に携わってきた著者たちが分析・提言する。



慶應義塾大学出版会

▼アルバート・M・クレイグ著『文明と啓蒙―初期福澤諭吉の思想』（足立康・梅津順一訳、三六七五円）西洋の啓蒙思想を自在に駆使して、日本を近代化へと牽引した福澤の思想の源泉を実証的に考究する。ハーヴァード燕京研究所の碩学による待望の福澤論。

▼ピーター・シリングスバーク著『グーテンベルクからグーグルへ―文学テキストのデジタル化と編集文献学』（明星聖子・大久保讓・神崎正英訳、三三六〇円）デジタルの「本」の氾濫は、作家や出版社などの供給者、読者や研究者などの受容者に何をもたらすのか。Google ショックの本質を衝く必読書。

▼『バブル／デフレ期の日本経済と経済政策』全7巻（企画・監修 内閣府経済社会総合研究所）。一九八〇年代からの四半世紀日本経済の動向と経済政策を、様々な視点から点検・評価する。わが国を代表する研究者、官民エコノミストの総力を結集し貴重な反省・教訓を後世に伝える画期的研究シリーズ。第1回配本は、第1巻『マクロ経済と産業構造』（編 深尾京司、五〇四〇円）。

ケンブリッジ大学出版局

▶ Cambridge Library Collection

Cambridge Library Collection は、ケンブリッジ大学出版局がケンブリッジ大学図書館と共同で進めているプロジェクトに基づくシリーズです。最先端のスクヤニングの技術を使い、今まで大学図書館に行かないと閲覧ができなかった書籍を新しい形で出版するもので、絶版及び著作権の切れたタイトルでほとんどが構成されています。この度、出版局創立四七五年を記念し、まず四七五タイトルの出版が予定されています。

現在、ケンブリッジ関連、歴史学、生命科学、文学研究、数学、音楽、物理科学、宗教学の分野が出版されており、今後は、考古学、古典学、言語学、哲学、テクノロジー、魔術の分野の出版が予定されています。十九世紀から二十世紀初頭の出版物を、各分野の専門家の意見に基づき選択。研究者が今でも閲覧するタイトル、または学生に推薦したいと思うタイトルが集まったコレクションです。

産業能率大学出版部

▼梅原潤一／酒井貴子共著『ストーリーでわかるビジネス実務法務の基本』（二二〇〇円）

東京商工会議所主催『ビジネス実務法務検定試験3級』に準拠した入門書。本書は、ビジネスパーソンが業務上知っておかなければならない法律知識について、読者が主人公になってストーリーを読み進めるうちに自然と身につく構成。ビジネス法務で扱う法律を豊富な事例とイラストを交えて分かりやすく解説。

▼荒巻基文著『コンサルティング・セールのすべてがわかる』（二二〇〇円）

本書では、お客様との信頼構築、顧客タイプ別対応法、ニーズを引き出す質問法、提案作成の方法、ソリューションの拡大、反論への対応と予防、効果的なクローキングの方法など営業の極意を解説。

「営業の極意がわかる23のモデル」をチャート化したもの、「自ら記入して使える15のシート」など実践できたくて役立つノウハウが満載。さらに「あなたを『できる営業』に変える12のスキル」でコンサルティング・セールスの極意がすべてわかる。

専修大学出版局

▼原田博夫編『身近な経済学—小田急沿線の生活風景』（新書判・二四〇頁・七三五円）

都心から郊外（神奈川県）に延びる私鉄沿線では各地域の歴史・社会特性・経済格差など現状がどうなっているかを調査・分析して、経済生活の知恵やビジネスの動きを解説。一〇名の気鋭の経済学・経営学の専門家が書き下ろした小論集である。向ヶ丘遊園の経済学、賢い保険選択のすすめ、これからのベンチャー企業、他。

▼中野育男著『米国統治下沖繩の職業と法』（A5判・二〇八頁・二九四〇円）

戦後沖繩では基地経済という土壌で、軍による労務賠償、労基法による保障義務の明確化、労災保険制度の形成などが進展していった。職業保障の観点では行政主導型の職業訓練があり、その実効性をめぐる取り組みもなされた。本書では基地沖繩のそうした特異な法制度の形成と発展の過程を考察し、その特質を究明している。

大正大学出版会

- ▼カール・ベッカー・円山達也編『いのち 教育 スピリチュアリテイ』（A5判・三二〇頁・二八三五円）。第一部「生と死の教育」では、「失うことは、学びと成長につながる」ことを、医療従事者の立場から論述。「失うことに気づくこと」は、人生にとって重要であることを問題提起。第二部「学校教育とスピリチュアル教育」では、いのちの教育、スピリチュアル教育の現状とその可能性について教育学・宗教学等の立場から論述する。第三部「いのちの教育とスピリチュアリテイ」では、いのちに対する感覚や意識の低下が問題になっている今、「いのち」の教育「スピリチュアリテイ」の関わりについての議論を展開する。
- ▼小嶋知善編『久保田正文著作選—文学的証言—』（A5判・八八二〇円）。
- ▼野田文隆著『マイノリティの精神医学』（A5判・五九八五円）。
- ▼TU選書（四六判・定価各一九九五円）
- ④星川啓慈著『対話する宗教—戦争から平和へ—』
- ⑤一島正真著『仏教のエッセンス』
- ⑥小峰彌彦監修『真言密教を探る』

玉川大学出版部

- ▼橋本鉦市編著『専門養成の日本的構造』（A5判・四四二〇円） 戦後日本の専門職養成に影響を与えてきた大学・国家・市場のパワーバランスとその変容を分析。今後の専門職養成のあり方と課題を展望する。
- ▼ヴォルフガング・ブレイツィンカ著／小笠原道雄、坂越正樹監訳『教育目標・教育手段・教育成果』（A5判・八四〇〇円） 教育学の中核である教育の成果と教育の目的・手段の関係を解明し、教育界の喫緊の課題である教育成果・教育評価の問題や、教育学のシステム化について論じる。欧米で高い評価を得た基本図書の邦訳。
- ▼西塚宏著『経営戦略の原点』（A5判・九六六〇円） 勝ち抜き企業になる経営戦略とは？ 市場の変化に即応した確かな戦略を実行するために必要な経営の知識が満載。中小企業経営者必携。
- ▼小原芳明監修／玉川大学経営学部編『企業のトップが語るビジネスリーダーシップ』（A5判・三二五〇円） 組織のリーダーに必要なとされるものとは？ 様々な業界の実務家十九人が、自己の豊富な人生経験とリーダーシップ経験を語る。

中央大学出版部

- ▼諏訪部仁著『ジョンソンとボズウェル』（三〇四五頁） 英語による最高の伝記『ジョンソン伝』を生んだ二人の交遊とその周辺の群像を描き、英国の名物男ジョンソンの典型的なジョン・ブル振りや驚異的な記録者ボズウェルの端倪すべからざる言動の謎に迫る。今や定説となった英文論文を含む二三編の邦・英文集。
- ▼姫田光義著『林彪春秋』（四八三〇頁） 林彪事件といわれる中国政治史上最大の事件は今なおナゾに包まれたままである。その解明のために林彪の栄光の道から没落への道という個人の生き様と、人治主義という中国政治の特質とを密接に絡ませて探究する。
- ▼星野智著『環境政治とガバナンス』（二八三五頁） 環境政治という政治学の新しい分野から、環境の歴史、環境運動、環境政策、環境ガバナンスという問題を取り上げる。地球温暖化などの地球環境問題についてはグローバル環境ガバナンスという枠組のなかで取り組みがなされているが、同時にEU、東アジア、北米などのリージョナル環境ガバナンスの問題も視野にいれている。

東京大学出版会

▼飯島渉・久保亨・村田雄二郎編『シリーズ20世紀中国史』（全4巻、各三九〇円）完結

二〇〇九年、成立から六〇年を迎えた中華人民共和国。中国にとって20世紀は激動の時代であり、一方、世界にとってこの近代化以降の中国をどう捉えていくかということは、現在の国際関係のなかでもっとも重要な問いである。本シリーズは、19世紀末からの歴史をふりかえり、社会主義化や改革・開放のなかで新たに登場したわけではない、構造的歴史的な蓄積としてさまざまな問題を解きあかすことを目的とする。国内をはじめ国外の中国史研究者も集い、最前線の研究成果を結集したものである。

『1 中華世界と近代』では、19世紀後半の清末から近代中国に向かう時期、『2 近代性の構造』では、20世紀前半、近代化再編の時期、『3 グローバル化と中国』では20世紀後半を論じる。『4 現代中国と歴史学』では中・台・韓・米・日の研究者が多様化する歴史学をひもどくとともに、全4巻の総索引・文献目録・年表を付して全体を俯瞰する。

東京電機大学出版局

▼足立修一著『システム同定の基礎』（A5判・二八三五円）この十数年間において、制御工学におけるシステム同定の地位が、理論と応用の両面において少しずつではあるが向上してきた。本書はそのシステム同定の教科書である。システム同定理論の基礎から解説し、理論の学習を手助けする演習問題も収録した。さらに制御にかかわる様々な周辺領域（デジタル信号処理、時系列解析、確率過程など）をも俯瞰する内容となっている。古典制御・現代制御を学習した後に本書の内容を学習することで、制御工学に対する大局観を得られるであろう。

▼藤原健一監修・カーエアコン研究所編著『カーエアコン』（A5判・三三二六〇円）カーエアコンのシステムは、安全・快適を達成するための空調技術から省エネ・環境対応技術や車内全面的熱マネージメントに至るまで、常に車の動向を先取りしながら多面的に進化してきた。本書ではその技術をまとめるにあたり、基本原理から保守点検、最新の技術動向まで理解できるように留意されている。

東京農業大学出版会

▼人のつくった森——明治神宮の森（永遠の森）造成の記録 上原敬二著
本書は、明治神宮創建五〇年の年に、企画発行された、上原敬二著「人のつくった森・明治神宮造成の記録」に図版を加えて、文言の一部を現代語表現にするなどの改訂版である。

平成二十一年は上原先生の生誕一二〇周年にあたり、明治神宮創建九〇年を来年迎えることから、この森がつくられる過程で生まれた日本の造園学の礎を多くの方に知ってもらおうというものである。

平成二十一年五月／四六判
一一〇頁／税込価格一〇五〇円



東京農工大学出版会

▼『人が学ぶ イヌの知恵』 林谷秀樹・渡辺元・佐藤俊幸・甲田菜穂子・対馬美香子著（B5判・一六四頁・一四七〇円（税込））

東京農工大学が知的資産を世の中に還元する目的で発行している「人が学ぶ」シリーズの第3弾。

イヌは、いまから4万年ほど前に、野生のオオカミを人間が飼い慣らして創りだしました。それ以来様々な育種を繰り返して、様々な犬種を生み出してきました。

本種では、こうしたイヌの生態や体の仕組み、行動に隠されているイヌの感情など意外と知られていないイヌの習性を平易に解説している。たとえば飼い主にしかかれていた時にあくびをするのは、飼い主をばかにしているのではなく、自分を落ち着かせようとする合図など、知っているとイヌとの関係を良好にするヒントになる。東京農工大学の獣医学科の教授ら5人による共著。



法政大学出版局

▼B・ステイグレル／石田英敬監修・西兼志訳『技術と時間1 エピメテウスの過失』（四四一〇円）ポスト構造主義の次世代を担う著者が技術を哲学の問題として捉え直す待望の名著、邦訳開始。

▼N・ルーマン／馬場靖雄他訳『社会の社会』（1・2、各九四五〇円）複雑化し流動化した近代社会においてあらゆる出来事が構造的に決定されているさまを描く、二〇世紀社会学を総括する試み。

▼S・ケラート、E・ウイilson編／荒木正純他訳『バイオフィリアをめぐって』（七一四〇円）「生命と生物に対する愛」、それは人間に生得のものか——学際的かつ多面的な視座から考察する。

▼M・ヴィヴィオルカ／宮島喬・森金香子訳『差異』（三一五〇円）欧米の政治哲学的議論を踏まえ、文化的承認要求と社会的不平等との闘争を結びつける観点から他者との共存のあり方を構想する。

▼福井貞子『木綿再生』（二八三五円）みずからの人生遍歴と木綿・緋を愛する人々との出会いを織り重ねてつづり、木綿の奥深い魅力を語りつつ、リサイクル文化としての木綿再生のみちを探る。

武蔵野大学出版会

▼小西聖子著『ココロ医者、ホンを診る——本のカルテ10年分から』（四六判・二四八頁・一九九五円）

著者は武蔵野大学教授として心理学を講ずるかたわら、精神科医、臨床心理士として患者さんや相談者に接し、会話を通して患者さんのココロの問題をときほぐす仕事もしている。さらにもう十年以上、毎日新聞読書欄で月一回のペースで書評を担当している。

興味と好奇心の赴くままに続けるうちに著者は書評という行為が人間のココロの問題の解明と同じように、本と会話し、そこにある問題を解きほぐし解明する営みであることに気づく。つまり、書きためた書評は本のカルテの束である。

十年分の本のカルテを集めて再編集すると独特の「心理学入門書的読書案内」ができあがった。



武蔵野美術大学出版局

▼向井周太郎著『デザイン学 思索のコンステレーション』（四六版、四六四頁、三一五〇円）

アブダクション、パウハウス、コスモロジー……デザインに関する重要なことばを星座（コンステレーション）のように散りばめ、そのことばとの出会いや意味世界を探る。章ごとの扉に掲げられた言葉の星座、ここから複数的関係性の世界がひらかれていく。本書は一般の学術書のように線形的で体系的な、あるいは起承転結的構成ではなく別のシステム、すなわちコンステレーション的思考方法によって、デザインという行為やその「学」の生成方法を意識化し、ひとつの問題提起としたものである。

著者は、四十年以上デザインを論じ、「デザインは専門のない専門である」という見解をくり返し、これを哲学に似た総合性だと提言し続けてきた。その眼はデザインが対象とする世界を、生命原理と深く繋がったものとしてみつめる。これはまさにデザインの根原的風景だといえる。本書は武蔵野美術大学における最終講義の記録に加筆し刊行された。

明星大学出版部

新テキストから。

▼教育行政と学校経営―改正教育基本法下の公教育制度の理念と構造
樋口修資編著 二八三五円

▼現代教育課程入門―知識基盤社会を生きたための学校教育を目指して
鯨井俊彦・青木秀雄・林幹夫著 一六八〇円

▼第2版 教師論―教職とその背景
森下恭光編 一六八〇円

▼第3版 道徳教育の研究
森下恭光・佐々井利夫著 一八九〇円

▼第2版 特別活動の展開
鯨井俊彦編 一五七五円

▼生涯学習概論 神山敬章・高島秀樹編 二六二五円

▼第2版 子どもの発達と環境―児童心理学序説 塚田紘一 二四一五円

▼初等音楽科教育法―ハートフルメッセー
一ジ 阪井恵・有本真紀 一八九〇円

▼みるみるわかる心理アセスメント―学ぶ・使う・活かす
黒岩誠・野口和也編 三〇〇〇円

関東学院大学出版会

▼『新しい英語史―シエクスピアからの眺め』島村宜男著（二二〇五円）

多様化の道を進む現代英語、その直接の淵源から説きおこす「新しい」英語史。文化史の面にも配慮した斬新な記述は、言語文化史の講義に最適。



▼『建築と土木の耐震設計・基礎編―性能設計に向けて』精木紀男・規矩大義編著（二七三〇円）建設地の地震動、大地震時の崩壊状態の検討、地震動を低減する免振や制振構造の普及など、耐震設計の基礎分野について平易に述べる。



東海大学出版会

ワグネルリアンの世界をのぞいてみよう

▼『リヒャルト・ワーグナーの妻 コジマの日記』(全一〇巻) 三光長治・池上純一・池上弘子訳(各A5判・七一四〇円) 一八六九年からワーグナーが死を迎えた一八八三年までリヒャルト・ワーグナーの妻であるコジマがつけていた日記の全訳。詳細な記録は創作面や日常生活などワーグナーの後半生における貴重な資料である。第一巻には一八六九年から一八七〇年五月までを収め、最新の第一〇月までを収める。

▼『年刊ワーグナー・フォーラム』(二〇〇二〜二〇〇九) 日本ワーグナー協会 編(各A5判・三〇四五円) 世界中の音楽ファンを魅了し続ける作曲家リヒャルト・ワーグナーの芸術文化の最新研究成果を収録するイヤープック。最新号(二〇〇九)の特集は「パルジファル」。



名古屋大学出版会

▼石川九揚著『近代書史』(一八九〇〇円) すべては本書への助走だった。現在にいたる日本の書の表現史を初めて全体として捉えた絢爛たるライフワークの完成。

▼佐々木英昭著『漱石先生の暗示』(三五七〇円) 恋から開化まで、理論と実作を貫く独自の(心)、その世界性を明証。文学の鍵を見出し、その世界性を明証。

▼小黒昌文著『ブルースト芸術と土地』(六三〇〇円) (土地)との絆/切断は芸術にとって何を意味するのか。同時代の文脈の中で新たな言葉の生成を捉える。

▼和田一夫著『ものづくりの寓話―フォードからトヨタへ』(六五一〇円) 原点を問い直す。日本で実現された大量生産方式の実像をスリリングに描き出す。

▼鮎京正訓編『アジア法ガイドブック』(三九九〇円) 経済発展とともに整備が進むアジア法の現在を詳説、その展開をダイナミックに捉えた本格的入門書。

▼在来家畜研究会編『アジアの在来家畜―家畜の起源と系統史―』(九九七五円) 家畜化の過程で動物と人とに何が起きたのか。永年の実地調査を軸に体系的に記述。一・二家畜種の系譜の全体像に迫る。

三重大学出版会

▼『経度の誕生―経度委員会と大英帝国 1714年〜1808年―』石橋 悠人著 (A5・二五四頁・二四一五円)

はじめに 第1章 再発見された経度

第1節 経緯度の概念 第2節 地図と空間の再検討 第3節 研究史と本書の課題 第2章 経度の追求 第1節 経度法の制定 第2節 クロノメーターと月距法の完成 第3節 経度測定法の「普遍性」 第4節 クックとトゥピアー

二つの地図をめぐって 第3章 科学組織としての経度委員会 第1節 経度委員会と国家 第2節 グリニッジ天文台と王立協会 第3節 時計メーカー 第4章 経度と帝国 第1節 海軍との連携

第2節 国科学としての経度測定法 第3節 インド会社とクロノメーター

第4節 旅する天文学者たち 第5章 再編と解散・経度委員会最後の10年 第1節 再編と極地探検 第2節 ケープ天文台設立の意味 第3節 経度委員会の解散・結論 文献一覧

▼『アメリカ先住民の日々』Elsie Chies Parsons 編、神徳昭甫訳。(四六判・五七〇頁・定価二九四〇円) 第2刷り

京都大学学術出版会

▼『空気力学の歴史』ジョン・D・アンダーソン Jr. 著 織田剛訳（六八二五円）飛行機をはじめ、様々な乗物に応用される空気力学。大気中の運動原理を探究する物理学者たちの関心は、航空技術の開発へつながってゆく。空飛ぶ理想を実現した彼らの足跡を、古代・中世から20世紀まで網羅する。

▼『オセアニア学』吉岡政徳監修編（七三五〇円）地球表面積の三分の一を占める太平洋に点在する小さな島々。地政学的な重要性和極端に少ない人口とのアンバランスが産み出す本地域の可能性と課題について、日本オセアニア学会が総力をあげて最新動向を一冊に凝縮する。人類の移動と居住戦略／環境と開発／身体と病い／植民地と近代化／文化とアイデンティティ

▼近代社会思想コレクション03『道徳哲学序説』ハチスン著 田中秀夫他訳（三九九〇円）ハチスンの死後出版された大講義用の教科書。古典派経済学を完成させたアダム・スミスにも深く影響を与え、新大陸アメリカでも独立宣言に至る改革運動の精神的支柱のひとつとなった。

大阪経済法科大学出版部

▼『刑事弁護士が語る裁判員裁判―ナニワの法廷から―』村下博・山口健一・岩村等編集（定価一五七五円）

《目次》
まえがき 編者一同（村下 博 山口健一 岩村 等）

第1章 刑事弁護人の仕事 山口健一

第2章 大阪地裁所長オヤジ狩り事件 山口昌之

第3章 刑事手続きの流れと刑事弁護人の心構え 寺田有美子

第4章 裁判員制度と取調べの可視化 佐藤正子

第5章 死刑事件…… 小田幸児

第6章 もし外国で逮捕されたら 正木幸博

第7章 交通犯罪 井原誠也

第8章 少年事件 三木憲明

第9章 犯罪被害者と刑事裁判 杉本吉史

第10章 公正な裁判と事件報道におけるマスコミ・法曹三者（裁判官・検察官・弁護士）の役割 山口健一

第11章 模擬裁判DVDを使用した裁判員裁判の解説 正木幸博

大阪大学出版会

〈阪大リーブル〉14〜17（四六判）▼藤田治彦編『芸術と福祉―アーティストとして人間―』（二九六頁・二三二〇円）▼松田祐子著『主婦になったバリのブルジョワ女性たち―100年前の新聞・雑誌から読み解く―』（二九四頁・二二〇五円）

▼山中浩司著『医療技術と器具の社会史―聴診器と顕微鏡をめぐる文化―』（二七八頁・二三二〇円）▼天野文雄著『能苑逍遙上・世阿弥を歩く／（中）能という演劇を歩く』（上・三二二頁、下・三二六頁・各二二〇五円）

▼八木絵香著『対話の場をデザインする―科学技術と社会のあいだをつなぐということ―』（四六判・二二四五円）▼東海明宏／岸本充生／蒲生昌志著『シリーズ環境リスクマネジメント2 環境リスク評価論』（四六判・二二〇〇円）▼中村孝一郎著『アメリカにおける公用取用と財産権』（A5判・四七二五円）▼大阪大学コミュニケーションデザイン・センター編『Communication・Design 2 異なる分野・文化・フィールド―人と人のつながりをデザインする』（B5判・二六二五円）

関西大学出版部

▼大倉雄次郎著『企業組織再編の会計戦略』(A5判・三六七五円) 企業組織再編における会計・経営・税法・戦略面が一目瞭然の研究書。合併効果の算定、事業継承戦略等のM&Aにおける理論・手法・事例分析について述べている。

▼孝忠延夫他編著『グローバル市民社会における平和、安全、そして安心』(A5判・三六七五円) 編者らが関西大学法学研究所、法学部等で一貫した問題意識の下に企画してきた各種シンポジウム、研究会等での研究報告をまとめ、二一世紀グローバル市民社会を展望しようとするもの。

▼野間晴雄著『低地の歴史生態システム』(A5判・四四一〇円) 日本稲作社会における技術・むら・開発史・生活文化について「歴史生態」をキーワードに、比較歴史地域論として提起。

▼中谷伸生編著『東アジアの文人世界と野呂介石』(B5判・三八八五円) 東アジアの近世・近代社会では、文人達が絵画や詩等の芸術作品によって、共通する文人世界をつくり上げてきた。美学・文学等の立場から文人の諸相を明らかにする。

関西学院大学出版会

近刊

▼市川 文彦・奥野 良知 他著
K. G. りぶれつとNO. 24
『フランス経済社会の近現代―その史的探訪』(A5並製・八二頁・定価七三五円)

▼市川 文彦・鶴田 雅昭編
K. G. りぶれつとNO. 25
『観光の経営史―ツーリズム・ビジネスとホスピタリティ・ビジネス』
(A5並製・七二頁・定価七三五円)

▼重松 健人著
『言語と「期待」―意味と他者をめぐる哲学講義』(A5並製・二五二頁・定価二二一〇円)

▼中野 秀一郎著
『明日に希望のもてる医療はあるのか―新・医療社会学入門』(四六並製・二一〇頁・定価一七八五円)

好評既刊
▼赤坂 真人著
『社会システム理論生成史―V. パレート・L. J. ヘンダーソン・T. パーソンズ』(A5上製・一八〇頁・定価三九九〇円)

九州大学出版会

▼西 英昭『臺灣私法』の成立過程―テキストの層位的分析を中心に―(A5判・五八八〇円) 台湾旧慣調査における最終報告書『臺灣私法』を唯一の結論として受け取るのではなく、調査の各段階での報告書を一字一句校合することで議論過程を詳細に復元し、その議論の有する豊かな可能性につき再定位を試みる。

▼中内克昌『アキテーヌ公ギヨーム九世―最古のトルバドゥールの人と作品―』(A5判・三三六〇円) 高い身分にありながら奔放に生き非常に個性的であったといわれるアキテーヌ公ギヨーム九世。現存する11篇の詩作品と解説、またその生涯や言語の分析を通し、人物像を浮き彫りにする。

▼堀江康熙『Behaviors of Japanese Regional Financial Institutions―The Changing Business Environments: the Issues of Income Disparity and an Aged Society―』(菊判・四六二〇円) 地域間格差や高齢社会の進展に伴い、地域金融機関にどのような経営行動の変化が生じているか分析する。

一般社団法人 大学出版部協会賛助会員

【50音順】2009年7月31日現在

株式会社朝日新聞社	〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2
垂細垂印刷株式会社	〒380-0804 長野県長野市大字三輪新屋1154
株式会社アベル社	〒162-0825 東京都新宿区神楽坂2-19 銀鈴会館408
尼崎印刷株式会社	〒661-0975 兵庫県尼崎市下坂部3-9-20
王子製紙株式会社	〒104-0061 東京都中央区銀座4-7-5
株式会社大森印刷	〒105-0003 東京都港区西新橋3-17-1
岡本出版発送株式会社	〒353-0001 埼玉県志木市上宗岡3-16-2
カクタス・ジャパン株式会社	〒103-0021 東京都中央区日本橋本石町2-1-1 アスパ日本橋オフィス
城島印刷株式会社	〒810-0012 福岡県福岡市中央区白金2-9-6
株式会社京都学術振興会	〒605-0009 京都府京都市東山区大橋町88-1 辻野ビル2F-A
株式会社クイックス東京	〒102-0073 東京都千代田区九段北4-1-13 ニュー原鉄ビル5F
港北出版印刷株式会社	〒150-0002 東京都渋谷区渋谷2-7-7
三松堂印刷株式会社	〒101-0065 東京都千代田区西神田3-21 住友不動産千代田ファーストビル南館1階
三美印刷株式会社	〒116-0013 東京都荒川区西日暮里5-9-8
三立工芸株式会社	〒101-0061 東京都千代田区三崎町3-2-10 寺西ビル3F
三和印刷株式会社	〒381-2226 長野県長野市川中島町今井薬師堂1822-1
信濃印刷株式会社	〒102-0072 東京都千代田区飯田橋4-1-11
新日本印刷株式会社	〒162-0801 東京都新宿区山吹町342
株式会社鈴木製本所	〒112-0014 東京都文京区関口1-17-5
大同印刷株式会社	〒849-0902 佐賀県佐賀市久保泉町上和泉1848-20
ダイニック株式会社	〒105-0012 東京都港区芝大門1-3-4 ダイニックビル7F
株式会社太洋社	〒501-0431 岐阜県本巣郡北方町北方148-1
株式会社竹尾	〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-12-6
土山印刷株式会社	〒601-8305 京都府京都市南区吉祥院宮ノ東町7
宗教法人天然寺	〒204-0021 東京都清瀬市元町1-4-5-711
株式会社東京弘報社	〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-34
株式会社とうこう・あい	〒104-0061 東京都中央区銀座8-11-11
株式会社日本経済新聞社	〒100-8066 東京都千代田区大手町1-9-5
萩原印刷株式会社	〒112-0004 東京都文京区後楽2-21-12
株式会社博報堂	〒108-0023 東京都港区芝浦3-4-1 グランパークビル17F
株式会社平文社	〒170-0005 東京都豊島区南大塚2-35-7
宗教法人法界寺	〒287-0003 千葉県香取市佐原イ-1057
株式会社堀内印刷所	〒335-0034 埼玉県戸田市笹目3-11-5
株式会社毎日新聞社	〒100-8051 東京都千代田区一ツ橋1-1-1
株式会社遊文舎	〒532-0012 大阪府大阪市淀川区木川東4-17-31
株式会社読売新聞東京本社	〒100-8055 東京都千代田区大手町1-7-1
株式会社ライトコミュニケーション	〒101-0047 東京都千代田区内神田3-2-8 COI内神田ビル3F
渡辺印刷株式会社	〒152-0031 東京都目黒区中根2-7-1

一般社団法人大学出版部協会は、私たちの活動をご理解・ご支援下さる皆様による「賛助会員」制度を設けています。ここに趣旨にご賛同下さり、ご支援頂いている各社様をご紹介させていただきます。なお「賛助会員」に関するお問い合わせは協会事務局までお寄せ下さい。

●広告掲載出版社一覧（掲載順）

有斐閣	〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-17
未來社	〒112-0002 東京都文京区小石川3-7-2
日本評論社	〒170-8471 東京都豊島区南大塚3-12-4
ミネルヴァ書房	〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1

一般社団法人大学出版部協会 加盟出版部一覧

北海道大学出版会

〒060-0809 札幌市北区北9条西8丁目 北海道大学構内
TEL 011-747-2308 FAX 011-736-8605

弘前大学出版会

〒036-8560 弘前市文京町1番地 弘前大学附属図書館内
TEL 0172-39-3168 FAX 0172-39-3171

東北大学出版会

〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1 東北大学構内
TEL 022-214-2777 FAX 022-214-2778

流通経済大学出版会

〒301-8555 龍ヶ崎市平畑120
TEL 0297-64-0001 FAX 0297-60-1165

聖学院大学出版会

〒362-8585 上尾市戸崎1-1
TEL 048-725-9801 FAX 048-725-0324

聖徳大学出版会

〒271-8555 松戸市若潮550
TEL 047-365-1111 FAX 047-363-1401

麗澤大学出版会

〒277-8686 柏市光ヶ丘2-1-1
TEL 04-7173-3320 FAX 04-7173-3154

慶應義塾大学出版会

〒108-8346 港区三田2-19-30
TEL 03-3451-3168 FAX 03-3451-3124

ケンブリッジ大学出版局

〒101-0054 千代田区神田錦町1-10-1 サクラビル1階
TEL 03-3291-4068 FAX 03-3219-7182

産業能率大学出版部

〒100-0005 千代田区丸の内1-7-12 サピアタワー9階
TEL 03-6266-2400 FAX 03-3211-1400

専修大学出版局

〒214-0033 川崎市多摩区東三田2-1-2 専修大学購買会別館2階
TEL 044-911-7179 FAX 044-911-1382

大正大学出版会

〒170-8470 豊島区西巣鴨3-20-1
TEL 03-5394-3026 FAX 03-5394-3038

玉川大学出版部

〒194-8610 町田市玉川学園6-1-1
TEL 042-739-8935 FAX 042-739-8940

中央大学出版部

〒192-0393 八王子市東中野742-1
TEL 042-674-2351 FAX 042-674-2354

東京大学出版会

〒113-8654 文京区本郷7-3-1 東京大学構内
TEL 03-3811-8814 FAX 03-3812-6958

東京電機大学出版局

〒101-8457 千代田区神田錦町2-2
TEL 03-5280-3433 FAX 03-5280-3563

東京農業大学出版会

〒156-8502 世田谷区桜丘5-1-1
TEL 03-5477-2562 FAX 03-5477-2643

東京農工大学出版会

〒183-8509 府中市幸町3-5-8 東京農工大学内
TEL 0423-67-6700 FAX 0423-67-6700

法政大学出版局

〒102-0073 千代田区九段北3-2-7 法政大学一口坂校舎内
TEL 03-5214-5540 FAX 03-5214-5542

武蔵野大学出版会

〒202-8585 西東京市新町1-1-20 武蔵野大学構内
TEL 042-468-3003 FAX 042-468-3004

武蔵野美術大学出版局

〒180-8566 武蔵野市吉祥寺東町3-3-7
TEL 0422-23-0810 FAX 0422-22-8309

明星大学出版部

〒191-8506 日野市程久保2-1-1
TEL 042-591-9979 FAX 042-593-0192

関東学院大学出版会

〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1
TEL 045-786-7164 FAX 045-786-9898

東海大学出版会

〒257-0003 秦野市南矢名3-10-35 東海大学同窓会館3階
TEL 0463-79-3921 FAX 0463-69-5087

名古屋大学出版会

〒464-0814 名古屋市中千種区不老町1 名古屋大学構内
TEL 052-781-5027 FAX 052-781-0697

三重大学出版会

〒514-8507 津市栗真町屋町1577 三重大学図書館3階
TEL 059-232-1356 FAX 059-232-1356

京都大学学術出版会

〒606-8305 京都市左京区吉田河原町15-9 京大会館内
TEL 075-761-6182 FAX 075-761-6190

大阪経済法科大学出版部

〒581-8511 八尾市楽音寺6-10
TEL 072-941-8211 FAX 072-941-9979

大阪大学出版会

〒565-0871 吹田市山田丘2-7 大阪大学ウエストフロント
TEL 06-6877-1614 FAX 06-6877-1614

関西大学出版部

〒564-8680 吹田市山手町3-3-35
TEL 06-6368-1121 FAX 06-6389-5162

関西学院大学出版会

〒662-0891 西宮市上ヶ原一番町1-155
TEL 0798-53-5233 FAX 0798-53-9592

九州大学出版会

〒812-0053 福岡市東区箱崎7-1-146 九州大学構内
TEL 092-641-0515 FAX 092-641-0172